

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和八年七月作品集



春から夏へ

高尾ひとみ

北は日本海、南は宍道湖に臨む島根半島の初夏。そこへ行く途中の県境には、まだまだ春の山が連なり、淡い色から濃い色までさまざまな緑に彩られて、見ていて飽きることがなかった。一方、宍道湖の水の美しさ、村々の畑や花は、初夏の明るさとエネルギーに満ちていた。海岸は砂岩層と泥岩層が織りなす縞模様の荒磯、山肌には巨大な断層。荒々しい自然は、瀬戸内を見慣れた目にはとても新鮮だった。島根半島の山は椎の花の真っ盛りだったが、帰りのバスであらためて見ると、広島の方に椎の花は咲いていなかった。

山々に春の名残や県ざかひ

鳴きながら高きへ雲雀消えゆけり

夏の日に水底透くる宍道湖かな

芍薬の秋鹿とふよき名の里に

言問へば草取の手を止めくれし

堀りたての玉葱土間にあいの風

磯鶉荒磯に立てば鳴きわたる

細き路地くぐり漁村の夏つばめ

鳩の笛わたりて池の静まれり

九十九折下れば椎の花香る

《作品鑑賞》

雲雀

山陽と山陰との往復の車中で充分に季節の移ろいの違いを感じられたのですね。作品の中から作者の自然への視点の鋭さを感じました。

私も温泉地の多い山陰へは、仕事や旅行で度々訪れましたが、十句を拝読し、もっと自然への視点を深めれば良かったと悔やまれます。華やかな春から夏にかけての季節の移行はあつという間で、勢いがあり動植物の活動が盛んですね。この季節の山陰路を私も一緒にさせて頂いたような気がしました。

芍薬の秋鹿とふよき名の里に

風光明媚な秋鹿という素敵な地名にお似合いの芍薬の花の美しさが際立っていたことでしょう。秋鹿と言う名のお酒もあるようです。

言問へば草取の手を止めくれし

旅の中では土地の人との交流があれば一層味わいが深まりますね。島根の人のゆったりとした暮らしぶりが感じられます。

磯鶉荒磯に立てば鳴きわたる

夏の到来を待っていたかのように勢いよく鳴いている磯鶉、海岸の岩場に私も立っている気分になります。

九十九折下れば椎の花香る

新緑の中に淡い黄色の長い穂状の花が山肌を黄色に染めていたことでしょう。

豆咲いて子の駆けてゆく郡家跡

ひとつ咲く蛍袋へ登る

あぢさゐの昨夜の雨にしなりけり

あぢさゐの道来て手水使ひけり

とりどりの鳥の声する夏木立

白シャツに山の風入れふくらませ

縦横の道に夏草駅家跡

見るたびに紫陽花の色確かむる

真つ直ぐに傾いてゐるダリアかな

梅の実に絶ゆることなく波寄する

木も山も湧きたつ夏の霧に消ゆ

朝蟬の声に目覚めて良き日かな

帰る船見届けて去る夏の浜

さみだれや浦に鴟の飛び交うて

朝涼し眉を細めに引きにけり

尼寺跡を柄長の群の渡りけり

雨風を合羽に受けて夏の浜

水浴びの鳥を見てゐる夏の昼

蛙鳴く市外局番086

一村に吹き荒びたる夏嵐

夏暖簾くぐりて帽子買ひにけり

このたびは梅雨のさ中や安芸国

山裾の家までつづく青田かな

暮れてゆく里山にあり雲の峰

よき鰯の刺身を食らふ至福かな

鳴けよかし磯鶉は屋根の上

夏草の刈り跡に寄り子ら遊ぶ

梅雨寒の風入れ酔ひを覚ましをり

近寄れば雨の雫か合歓の花

鬼蜻蛉また飛びゐたる坂の上

佐保光俊

高尾ひとみ

あぢみ

ペンケース出店で選ぶ薄暑かな

滴りにそつと触れたる山路かな

若葉風足を投げ出しテラス席

とまり木にただ居るインコ梅雨の入

風鈴の千の音聞く社かな

マティーニを指で混ぜたる夏の庭

夏空や若葉マークの子の車

きららかに風鈴売の通り過ぐ

老鶯の鳴き交わしたる野行かな

夏山の連なりを見る車窓かな

しみじみと歯茎よろこぶ鱧食へば

時折は空を見上ぐる梅雨の入

川べりのアイスコーヒー友と飲む

やきとんに焼かれし舌に冷酒かな

店先に鹿の子立てる嚴島

刈りたての生垣匂ふ梅雨晴間

流れくる鰻の煙酔ひ始む

五月雨と鐘の音聞く大経堂

夏至の夜や一話完結時代劇

反抗もせで親になる裸かな

雉鳩の山より出でし五月空

コーヒーのぬるき卯の花腐しかな

三角州あふるる人や揚花火

青梅雨やけぶれる山に音のなく

海芋咲く花壇の隅に二三本

大花火夫の横顔金色に

青鷺の足悠然と川渡る

教師の声よく聞こえたるプールかな

北斎の富嶽の藍の涼しさよ

蝶々のたゆたうままに草茂る

亜矢

綾乃

井藤希

風薫る夫と出かける絵画展

山膚にへばり付くかに夏館

黒揚羽厨の方へ我もゆく

杉落葉美術館への道を埋め

新じゃがを広げし軒へ俄雨

身支度を終へてひと時四葩見る

百合の香に目覚めて朝を迎へけり

裏戸から灯りの洩れて夏の草

笹百合を見てと妹前に行く

百合の花小さき揚羽の舞ひ降るる

庭に干す四五本の傘夏燕

草刈機吾子が背負うて草を刈る

梅雨の朝庭に藍莓熟れはじめ

日盛りやテレビの音が二階から

夏霧にテールランプを見て走る

朝涼やアガパンサスに風の吹く

四阿を風の吹き抜け布袋草

近道は未舗装の道斑猫飛ぶ

老鷺の川向うより聞こえけり

青鷺の一羽舞ひをる峡の暁

あの声は赤翡翠と耳澄ます

合歓咲いて山路にしばし安らぎぬ

枇杷熟るる城址へと行く坂に沿ひ

吾子に夫指示され肉と茄子を煮る

蚊帳のなか昔話を祖母に聞き

親子連れと挨拶交はす道涼し

フェンス越し部活の日焼の子を見つめ

七夕の短冊に書く世界平和

手から手へ渡すビールやスタジアム

合歓の花好みし母や母偲ぶ

大畑恵

暁子

すみれ

クッションでうたた寝をして春時雨

遠足の列に手を振る発掘中

柱跡は奈良時代なり春深し

青麦や球技大会ある職場

夏近し溪流の石拾ひたる

旧作の映画ポスター夏近し

夏近しヒーローショーを応援す

行き来する連絡船や夏来る

初めてのお笑いライブつばくらめ

出囃子を待ちたるあひだ若葉風

竹田千紘

帯解いて汗の吹き出す夕まぐれ

馬鈴薯の花咲く畑に道ますぐ

遡上する魚に声かけ夏の川

日の昇り雲海少しづつほぐれ

足下に雲海風となりて来る

アイヌ語が地名に残り雲の峰

明日咲くか蓮華のつばみ眺めをり

針葉樹の森に消えたる旱星

膝抱き見上げてをりぬ夏の星

星のほか見ゆるものなし河鹿笛

知佳子

わが家に來し燕をいつも覗きをり

朝起きて燕居るかと見に行けり

病院の待合室から見る若葉

食細る母の食べたるメロンかな

プラレールで遊ぶ幼子夏座敷

今年また実家の前で螢狩

幼子が螢追ひかけ土手走る

田草取済み小流に足下ろす

一時間掘りて馬鈴薯どっさりと

青葉風最前列で踊る君

ちどり

雨上り宙返りして燕去る

誕生日百本の薔薇の夢を見る

解説が終わりて静か夏の寺

若葉する公孫樹並木を漫ろ行く

空高く伸びる公孫樹に梅雨の風

お品書き何度もめくる餡蜜屋

梔子の香る夕風受けにけり

葉に触るる香りの中にトマト挽ぐ

極彩のハイブリッドや透百合

梅雨茸を足蹴にしたる遊びかな

花擬宝珠手を差し出して擡げたる

太陽に向いて金色透百合

ツツピーと何処かで鳴いて梅雨晴間

席を立ちシャワーを浴びに叱られ子

プラスチックではない艶の透百合

姫路城見ゆる大路や梅雨晴間

大滝の落ち来る前に手を広ぐ

いつの間に針と糸持つ更衣

老鷺の声にバーディー決まりたり

驟雨来て鉛筆の音消されたる

裏口にツアートラック夏燕

夏の夜の反戦歌手の死を報ず

潮騒を耳に眠れる夏の宿

夏の夕叫ぶ二度目のアンコール

潮引きし猿猴川に蟹うごく

子と二人夕焼空を帰りたる

梅雨空や傘の賑わうタコス屋台

気ままなる一人暮らしやメロン切る

一人来て池に蜻蛉の羽音聞く

トコトコと五月雨楽し丸耳象

辻純江

雲雀

ふじ女

父の日の夫やポロシャツよく似合う

山鳩の声に梅雨明く朝となり

どくだみに覗く顔あり猫の道

梅雨晴間そこかしこから鳥の声

麓なる鎮守の森の朝涼し

ジギングの竿を掠めてつばめ魚

梅雨の晴護岸を波の打ちやまず

日の盛中庭を風吹き抜ける

夕暮の五橋をくぐり夏燕

青岬回つて来たる遊覧船

中庭の池を飛び交ふ蜻蛉かな

夏霞岩国城の暮れかかる

初蟬に立ち止まりまた立ち止まる

敷石に沿うて昼顔植ゑてあり

天窓をたたく五月雨夜もすがら

病室は消灯となり夏の月

夕焼に布団取り込む匂ひかな

納骨に集へる人や梅雨晴間

眼帯を取れば大きく夏の空

日除出す床屋の主人よくしやべる

白檀の仏間に聞ける送り梅雨

校門を出て目の前に凌霄花

洪団扇竈の脇に立て置かれ

汗の染みし妻の枕や夜の桃

釣人を見てゐる鴉日の盛

きちこうを前に抹茶を頂きぬ

墓参り日々の散歩に加へたる

どしやぶりの雨を抜くると雲の峰

男衆作務衣姿で花火観る

桐の実や樹木葬墓に影うつり

松田裕子

村上正人

森口良樹

ツツチーと名を付けてをり土蛙

石垣の深き鑿跡青時雨

うつすらと見ゆる新緑窓開くる

窓辺より頭の蒼き燕かな

早苗饗やおかつば頭で正座して

青葉風露地に目をやり茶会待つ

夏の蝶線路に一頭土佐路かな

五月雨やランプシェードの灯るカフェ

一面の睡蓮前に立ち話

柿若葉雫ひとつの光りける

梅雨晴や城門高き鬼ノ城山

梅雨雲を抜けて降り立つ雨の町

琴習ひ窓より見ゆる苔の花

引揚げのDVD見る短夜かな

こんなにも雲切れぬとは梅雨の町

鉄塔にひとつ懸かる巢夏の空

短夜や鉛筆削る音のして

出水川橋にぶつかり流れ変へ

日御碕地層を洗ふ夏の波

夏深しコンビナートへ鉄路伸び

出水川橋に逆巻き烟りをり

折れし針並べし隙間夏の朝

空蟬が葉裏にふたつ夕の風

驟雨過ぎ土より出づる団子虫

格子戸やラムネの旗の揺れてをり

大学に鰻の飼はれ夏の月

出勤時目の前に立つ雲の峰

秋楡

今井淳子

なつ

ミステリーの結果はらはら明易し

里はいま植田となりて風やはし

約束の人を待ちをり半夏雨

長梅雨にいく度確かめ前の川

夕の風茅の輪くぐれば強くなり

蒔かぬのに草の間に紫蘇茂る

吟行に旅立つあした二重虹

夏館畳表を踏みゆけり

人影の近づく夕べ月涼し

山野ウタ

同窓と後樂園の花菖蒲

サイレンの夢にひびきて明易し

更衣終へてよりする水仕事

少しづつ違うてゐたる枇杷の臍

キッチンでことしも冷素麺を食べ

夏料理ガラスの皿に盛り付けて

いざ食まん茄子漬の藍褪せぬ間に

黴の来ぬやうに形見の和服干す

藤堂暢子

あの山を船から眺め夏来たる

夏の浜遠くの島を見つめをり

甲板の夏雲近く流れをり

六月の船から眺め呉の街

六月の船から見たる夕日かな

肩に凭れ眠つてをりぬ風涼し

御船印貰つてをりぬ夏夕べ

帰りに三人の黙月涼し

土肥律子

吉備津宮紫陽花のなか徘徊る

手を引かれ子供のくぐる茅の輪かな

水無月の祓の菓子や夜の雨

チヨグーと鳴きし鳥はなに夏の朝

水琴窟の音に安らぐ夏の果

式部も見しか源氏の庭のこの桔梗

コスモスや手押し車を凜と押し

前田範子

目の合うて葉先に動く雨蛙

山門に立て掛けられて捕虫網

遠郭公釧路湿原見下ろして

海霧深し釧路の町を子と二人

お点前は子供なりけり土用餅

朝顔の脇目絡みてよぢ上る

高嶋絹代

朝まだきひとり茅の輪をくぐりけり

空蟬にゆるりと朝の風の吹く

すれ違ふサラリーマンの日傘かな

友は赤私は青のソーダ水

向う岸なほ咲きつづく夾竹桃

咲き揃ふ夾竹桃の二番花

撫子

軒下の燕の子けふ飛び立ちぬ

挽ぎ立てのトマトを並べ朝の膳

夏の蝶葉陰を行つたり来たりせり

コンサート帰りに友と飲むビール

今日もまた日傘行き交ふ交差点

百日紅咲き満ちてなほ咲き始む

美耶

足元に紫陽花濡れて傾ぎたり

敷石にしばし動かぬ梅雨の蝶

青田波山々遠く連なりて

花擬宝珠板塀の沿ふ石畳

風無くて病葉とめどなく落つる

大原良子

雨脚のすこし弱まり蓮浮葉

七夕にアルバム置いて嫁ぎけり

曙の草木より沸く蟬の声

熱帯夜明けて風なき町をゆく

新宿の路線図見上げ夏の旅

熊谷ゆり子

夏の草被災に涸れし池の底

半夏雨ひねもす留守を守りたる

午後からは風向き変はり梅雨の晴

飛び込みの岩そのままや七十年

神輿揉む老いも若きも国訛り

志路猿

仏法僧ことしも巢箱に入りたる

窓に差す朝日と蟬の大きな声

日傘持ち通院帰りの電車待つ

図書館に夏のひと日を遣り過ぐす

日没を待つて出掛くる夕涼み

民

雨止みて楠の若葉を見上げをり

紫の解れかけたる花菖蒲

園児らに指でつつかれ蝸牛

露剥いて爪に香りと灰汁のこる

ほうたるの川の下見に散歩せり

みさ子

日傘さし孫の歩幅に合はせたる

ジャーすると蛇口指差し水遊

ゴミ置場脇に向日葵二三本

買ひ忘れコンビニまでの夏日影

席に着きまづ頼みたるソーダ水

山崎桂子

餌撒けば子雀ちちと仲間呼ぶ

手の届かず拾うて齧る杏かな

朝顔を一輪挿してお茶を汲む

裏年か今年は柿の花を見ず

初挽ぎの茄子を刻みて朝餉かな

和田史子

かかと上げ桜一枝取りにけり

手を伸ばし夏みかん三つ取りにけり

妹と葉桜の道散歩する

大皿に真つ赤なトマト並べ見る

河原静子

グラジオラス倒れしままに咲いてをり

傘杖に歩いてゆける夏の道

参道にそこそこ振花の咲いて

この暑さ人影も無き山の村

紀英子

経堂に風の届いて花擬宝珠

通り雨過ぎて昼寝子覚めしかな

故郷を訪ねし今日の髪洗ふ

かなぶんを夜の闇へと抛りけり

桑門わかこ

流るるがごとく浴衣の少女ゆく

早朝の観戦の声梅雨晴間

夏空へ校外授業の声響く

玉入れに綱引きに汗流れをる

古川廣子

浴衣着て異国の人がギター弾く

梅雨晴や舳先に魚の跳ぬる音

仏前に友より届く西瓜かな

十七の頃に集ひしパリー祭

森田敦子

新じやがにみちのくのバター乗せるかな

どこそこの冷房の音路地を行き

夏氷おしやべり終へて席を立つ

この町に住んで十年芙蓉咲く

やす保

日盛に観光客の行き来かな

青鷺の颯爽と橋渡りたる

御座船に手を振つてゐる夏の夜

上島康子

夏霞蜜柑色した日の出づる

冷房に気付けば朝は身を丸め

痛む腰プールの中の散歩かな

上條忠

梅雨深き午後銭湯のジェットバス

梅雨晴間夫はゴルフに早起きす

摘みし大葉冷素麺に添へ昼餉

桜湯

百合の香の帰るや否や匂ひ立つ

白蓮の泥より出でて咲きにけり

梅雨明を待つて飛び込む海の中

弥生

令和八年六月作品集より

井藤希

私の選んだ十句

松蟬のこれほど鳴かぬ日もあるか

佐保光俊

うつすらと髪染めし子や夏はじめ

亜矢

どの色も雨に濡れたり額の花

知佳子

少年のフルート吹くや姫女苑

辻純江

その家は十葉咲いて静かなり

雲雀

花は葉に柱の疵の背丈かな

森口良樹

文机の今朝の一輪杜若

今井淳子

母の日や母なき年を重ねつつ

なつ

微睡みに聞こえてゐたる時鳥

上條忠

芍薬が所狭しと道の駅

民

暁子

私の選んだ十句

大岩魚水面に鰭を出しにけり

佐保光俊

山法師すでに朝日の高くなり

高尾ひとみ

鴉の子隣とうちの屋根行き来

あざみ

番号で人呼ぶ役所走り梅雨

亜矢

鳶の輪の空の真青や夏に入る

井藤希

短夜の土砂降り朝は止んでをり

すみれ

どの色も雨に濡れたり額の花

知佳子

台風一過鯨めきたる雲ながれ

辻純江

茄子の苗店を回りて買ひ足しぬ

森口良樹

川の字で話続くや蛙鳴き

なつ